



## 海外語学研修報告

著者	久保田 章, 臼山 利信, 松下 聖, 加藤 百合, 武井 隆道, 小松 裕子, 池田 晋
雑誌名	外国語教育論集
巻	39
ページ	176-183
発行年	2017-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00151217">http://hdl.handle.net/2241/00151217</a>

## 海外語学研修報告

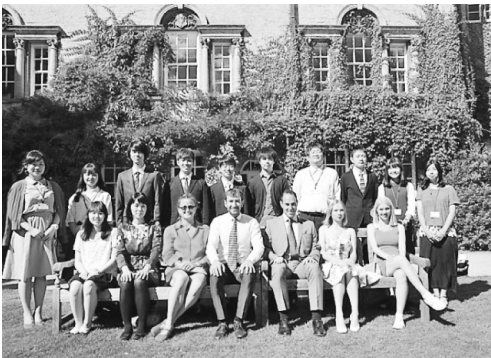
### 海外語学研修「英語 A」実施報告

オックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける夏期英語研修も3回目を迎えた。本年度の参加者は12名(学類生10名、大学院生2名)で、事前研修は8月11日に、本研修は8月28日から9月17日の3週間に渡って実施された。イギリスでは6月23日にEU離脱の是非を問う重要な国民投票が行われ、大方の予想に反してEU離脱派が勝利したこともあり、研修前には彼の地の世相の慌しさが心懸かりでもあったが、オックスフォードでは選挙結果の余波も感じられず、無事に研修を終了することができた。8月のイギリスは比較的天候不順だったそうであるが、幸いなことに9月に入ってから週末に若干雨となった以外好天に恵まれる日が多く、参加者の気持ちにもいっそう弾みがついたように思われる。

カリキュラムについては前2年のアンケート調査の結果を参考にハートフォード・カレッジと事前に調整を行い、基本的に月曜から木曜の午前中は様々な場面での言語活動を想定した英語の総合的学習、午後は主にオックスフォードやイギリスの文化や社会の特定のテーマに関連した実践的学習という授業構成とした。また金曜日は大英博物館やナショナルギャラリー、コッツウォルズ、プレナム宮殿などへの訪問研修を実施した。授業の最終日の9月15日には、3名ずつが協同でプレゼンテーションを行い研修の成果を確認した。過去2年では、比較文化的なテーマのプレゼンテーションがほとんどであったが、今年は指導教員の意向でそれ以外からテーマを見つけることが課題として加えられたので、「探偵小説」や「嗜癖」などいっそう興味深いテーマが揃った。前日夜遅くまでリハーサルを重ねるなど努力の甲斐もあり、一様に高評価を得ることができたことは言うまでもない。最終日の夜にはGala Dinnerという晩餐会が催され、参加者はあふれる充実感とともに研修の締めくくりの時間を大いに堪能したことと思う。

ハートフォードからは参加者に修了証書が授与されたが、それとは別に先方から筑波大に送付された参加者の総合成績とこちらが期間中に課した学習ポートフォリオの内容、さらに研修修了後に提出された英文レポートの成績をまとめて成績評価を行い、合格者に自由科目3単位を付与した。

本プログラムの特徴のひとつは、Residential Advisorというシステムで、選抜されたハートフォードの在學生2名が、寮滞在時のみならず、自由時間、訪問研修、週末など、つききりで参加者の面倒をみってくれる。今回も彼らの援助によって海外は初めてという参加者も安心して研修に集中できたと思われる。



カレッジの中庭でハートフォードのスタッフと

最後に、今年は大学の「はばたけ筑波大生」制度による旅費支援と日本学生支援機構(JASSO)の奨学金の両方を受けることも可能だったので、費用面ではかなり恵まれていたが、加えて上記の国民投票の結果急速にポンド安となり、最終的に研修費用が当初の予定より相当低く抑えられたことは、参加者にとってはラッキーだったと言えよう。

(久保田 章)

## 2016 年度キルギス夏期ロシア語研修について

臼山 利信・松下 聖

中央アジアのキルギス共和国でのロシア語研修は、今年度で3回目を迎えた。平成26年度に初めて実施した際は単位認定がされなかったが、2回目の平成27年度からは筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター（以下「CEGLOC」）「海外語学研修ロシア語B」（3単位）として、単位認定されるようになった。今年度も同科目の枠内で実施した。

キルギス共和国は1991年にソヴィエト連邦から独立し、今年で独立25周年を迎えた。同国はキルギス人が人口の7割以上を占めるが、キルギス語とロシア語が公用語とされ、ロシア語は教育やビジネスの言語として、首都ビシュケクを中心にキルギス国内で広汎に使用されている。キルギス人の話すロシア語に訛りはあまりなく、ロシアでロシア語を学ぶのと遜色ないと言ってよい。ロシアに比べると、物価が安い、3ヵ月以内の滞在であればビザが不要などメリットもある。

今回の研修実施期間は、平成28年9月1日から9月24日までの約1ヵ月間である。研修はJICA系機関のキルギス日本人材開発センター（以下、KRJC）とCEGLOCとの共催として実施された。KRJCは、本学の学術交流協定大学であるキルギス民族大学構内にある、同国内最大の日本文化発信の拠点である。またKRJCは、人文・文化学群開設科目「海外インターンシップ」のインターンシップ先としても提携するなど、本学と密接な協力関係にある。

研修には本学学生のほかに、大阪大学、関西大学の学生も参加した。本学の参加学生は、正規課程の学生が3名、科目等履修生が1名の計4名で、大阪大学、関西大学から1名ずつが加わり、合わせて6名での研修となった。

ロシア語の授業は習熟度別に3クラスに分けて45時間、キルギス語の授業は初級クラスを全員に対して9時間、計54時間受講した。ロシア語の授業はロシア語ネイティブがすべてロシア語で行った。研修の最終課題としてプレゼンテーションを課し、「高齢化社会」、「教育」、「食文化」、「ポップカルチャー」、「大阪」、「つくば」をテーマにし、各自がロシア語で5～10分程度の発表を行った。プレゼンテーションでは、参加学生は教員と現地の大学生を前にして、ロシア語で堂々としたスピーチをし、質問にもロシア語で答えていた。約1ヵ月の研修を経て、ロシア語能力が大幅に向上し、自信のついたことがうかがえた。

語学研修のほかに、KRJCによる異文化理解講座、在キルギス日本国大使館における安全ブリーフィング、JICAキルギス事務所におけるキルギス事情講義などを受けた。またイシクトリ州へのフィールドトリップも実施し、JICAによる一村一品プロジェクト（OVOP）の現場の視察、青年海外協力隊員との交流など、首都だけの滞在では決してわからない、地方特有の社会・経済的実情や現実の諸課題を学ぶことができた。

そして今回の研修の目玉は、ホームステイである。第1回目の研修からホームステイは実施していたが、第2回目までのホームステイ期間が10日間程度だったところ、今回は17日間と、研修のほぼ大半をホストファミリーのもとで過ごすように変更した。これは、毎回ホームステイの満足度が高く、参加学生のレポートからもホームステイの学習効果が非常に高いことが読み取れたからである。ホームステイでは一人で現地の家庭に入り、主にロシア語で意思疎通を図ることになる。当然、最初は苦勞するが、帰国が近づくにつれ別れが惜しくなるほど交流が深まったようである。帰国時にはホストファミリーからキルギス特産のハチミツ1kgをプレゼントされ感激したという参加者もいた。ホストファミリーはキルギス人の家庭が多かったが、中にはドゥンガン人（イスラム教を信仰する漢民族）の家庭がホストファミリーであったケースもあり、多民族国家の一端をうかがい知ることができた。

研修費用はKRJCのご厚意とご尽力により、非常に安く抑えられ、渡航費、宿泊費等込みで30万円以下におさまった。また本研修では、筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）、大学の世界展開力強化事業（ロシア）「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」に関わるJASSO協定派遣奨学金により支援ができ、参加者の自己負担費用は10万円以下になった。JASSOの経済的支援に心から感謝したい。

研修を終えて、参加学生は「さらにロシア語を勉強したい」、「留学をしたい」、「他のロシア語圏諸国へも行ってみたい」など、語学や海外留学に対するモチベーションが一気に高まったようである。今後もキルギスでの語学研修を継続し、こうした意欲ある学生を多く生み出していきたい。



少人数制のロシア語の授業風景



イシククル地方にて

## 平成 28 年度ロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学 夏期ロシア語研修について

2016年9月3日から9月24日までの3週間強、本学の協定大学であるロシア連邦サンクトペテルブルグ国立大学の協力・支援の下、同大学文学部附属ロシア言語文化カレッジにおいて夏期ロシア語研修（自由科目「ロシア語」3単位として開講）を実施し、本学から4名（人文学類1年生1名、国際総合学類4年生3名）が研修に参加した。この夏期ロシア語研修は CEGLOC 開講の授業としての認定を受け、45時間の授業時間を確保して研修期間が決められる。人文社会系加藤百合准教授（CEGLOC 協力教員）が引率・調整を担当し、週末や放課後などを利用して、在サンクトペテルブルグ日本国総領事館表敬訪問、日本センター訪問（所長からの講義と日本語学習者との交流）等、ロシアの文化や政治・経済情勢についての研修も付加された。

国際総合学類からの参加希望者は、ロシア語の履修経験が無くロシア語はキリル文字も読めない状態であったが、いずれも十分な英語運用能力があり、本研修参加に際しての動機が明確であり、研修において達成したい目標もはっきりしていたため、各自と面談した上で履修が認められた。（人文学類学生は、一学期間初修外国語としてのロシア語を履修しており、なおかつ筑波大学入学以前からロシア語を自習していた。）

参加者は、出発前に、危機管理研修、直前研修等数回の事前研修に参加した。上記のロシア語未習の参加者については、一学期分（10コマ）に相当するロシア語の補習授業を実施して、1. ロシア語（キリル文字）の読み書き、発音 2. 初級文法についての説明（教科書・教材を配布）3. 日常会話に必要な表現 について集中的に学んでもらい、サンクトペテルブルグ大学のロシア語コースでの学習効果が期待できるよう事前準備を行った。

参加者全員が、サンクトペテルブルグ国立大学の斡旋によりロシア人家庭でホームステイし、生きたロシア語とロシア人の実生活を体験した。英語は使わ（え）ずロシア語だけでコミュニケーションをとった家庭が多く、ホストファミリーと毎日会話して意思を疎通したいというのはロシア語学習のさらなる強い動機となった。よく使う語彙や表現について日英対照表をつくってくれたり、家庭でもロシア語を教えてくれるなどよい環境だった。

到着翌日に大学でプレイスメントテストを受け、自分のレベルにあったクラスに入り、文法、会話、発音、読解の各科目についてレベル別の小グループで授業を受けた。いずれも適正な授業を受けてロシア語力を大きく伸ばすことができた。途中で教師側からもう一段階上級のクラスにうつるよう勧められた者もあり、3週間は短期ではあるが海外語学研修の効果は目に見えるものであった。

授業外に組んで実施した研修には次のものがあつた。なおこれらの研修には、9月1日からサンクトペテルブルグ国立大学において1年間の交換留学を開始した

ばかりの筑波大生が2名（いずれも Ge-NIS（ロシア語圏諸国における産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム）プログラム生。サンクトペテルブルグ国立大学の国際関係学部、文学部にそれぞれ所属）参加した。

1. 日本センター訪問および松原斉センター長による特別講義（9月8日）

松原センター長より、ペテルブルグ郊外も含めて日系の企業が進出・展開している状況やロシア連邦内管区ごとの日本との貿易・経済協力の進展についてスライド等も利用して特別講義をしていただき、そのあとディスカッションを行った。企業就職に内定している国際総合学類の学生達から踏み込んだ質問が出ていたことが印象的だった。

2. 日本センター付属日本語教室視察、学習者との交流会（9月10日、17日）

日本センターで毎週水曜、土曜に日本語教室が行われている。教師は筑波大学出身の大平玲子先生その他数名で、生徒は日系企業に勤務するロシア人が多数を占める。授業参観後、小グループに分かれて学習者たちと交流した。数年継続して学んでいる方が多く、昨年度の本研修に参加した人にとっては「再会」となった。ロシア語と日本語の楽しさ難しさなどをお互いに語り合い、また、アニメ事情やロシアの若者の暮らしなど、興味深い話題が多かった。ここで仲良くなったため、放課後市内に移動し、カフェで続いて交流した。その後も学生さん達どうして週末など行動を共にすることがあったそうである。

3. サンクトペテルブルグ国立大学日本学科授業参加、市内研修参加（9月17日）

同学科の荒川好子先生、大平玲子先生（日本センター兼任）から、日本語の授業の対話練習相手として協力してほしいとお申し出があり、2名が2つの授業に参加した。

4. 日本総領事館表敬および福島正則総領事による特別講義（9月23日）

7月1日付で着任された福島新総領事からは、本研修日程の掉尾として、研修参加者の方から、ロシア、サンクトペテルブルグ、サンクトペテルブルグ国立大学、ロシア語授業等について、報告を聴きたいというご提案があり、各自が、研修を通じてどのようにイメージが変化したか、何を得られたか、ロシアやサンクトペテルブルグの印象、ステイ先ホームについて、など詳しくご報告した。その後総領事からモスクワやハバロフスク等の前任地と比較しながらの貴重なお話をうかがった。

帰国後10月19日（水）、G-NIS プログラム第一期生、キルギスでの夏期語学研修受講生と合同で帰国報告会を行い、サンクトペテルブルグ研修について分担して準備した報告を行った。これまで抱いていたロシアについてのイメージと、実際にロシア語、英語で自分の目で見耳で聞いて知ったロシアとの違いを実感したことを、生き生きと具体的に語っており、参加学生たちが今後のロシア語学習への強い動機を得たことがうかがえた。

\* 「はばたけ筑大生」によるご支援をいただきありがとうございました。今回、国籍等の関係で JASSO 奨学金が出ない参加者が複数いたこともあり、複数の制度が併用できたことで無事実施することができました。

（文責 加藤百合・監修 白山利信）

## バイロイト大学夏期ドイツ語研修について

武井隆道

今年度のバイロイト大学夏期ドイツ語研修は、8月2日から26日までの日程で実施された。

4名の学生が参加し、全員が無事帰国した。

8月の一般コースは、IIK Bayreuth (Institut für Internationale Kommunikation und Auswärtige Kulturarbeit) の主催による Sommeruni (夏期大学) のドイツ語コースである。IIK Bayreuth は、本学の研究教育協力協定校であるバイロイト大学のドイツ語教育、社会学、並びに経済学分野の代表者が1990年に設立した研究所で、バイロイト大学の関連学部との密接な協力関係のもとに、主として国際的な教育、研究活動に当たっている機関である。

本研修コースでは主として午前中に行われるドイツ語そのものの授業のほか、午後や週末にはバイロイト市内外の諸施設や歴史的遺産の見学、また市民の日常生活に接するプログラムが豊富に組み立てられており、参加した本学生にとっては、ドイツを、またひいては異文化を体験する絶好の機会になったことと思う。

海外の大学への留学は、筑波大学側の態勢整備が進んでいるが、とりわけヨーロッパの大学との交流のためには、EU 共通の言語能力基準 (CEFR) に即した授業態勢の確立、ボローニャ・システムと本学のカリキュラムの整合性の確保など、制度面での梃子入れが必要な時期にきている。CEGLOC がグローバル・コモンズ等の協力を得て、この領域で指導的な役割を担う必要がある。

## フランス語短期留学プログラム（夏期・春期）報告

CEGLOC 外国語部門フランス語セクションでは、2016 年度、はじめて公式にフランスでの語学研修プログラムへ学生を送り出すことができた。

このプログラムは、フランス政府留学局 Campus France(\*) との協定により、フランスの大学附属語学学校における 4 週間の語学研修プログラムへ学生を送り出し、現地での学習成果をもとに、本学の「海外語学研修フランス語 A」（夏期休業中）、「海外語学研修フランス語 B」（春期休業中）の 2 科目として、単位認定（1 科目 3 単位）を行うものである。

4 週間の本語学研修プログラムの目標は、現地フランス語研修による実践的フランス語能力の向上、および現地生活体験を通じたフランス社会や文化に関する理解、コミュニケーション能力・異文化対応能力の向上である。

2016 年度の研修日程は、夏が 2016 年 8 月 29 日（月）～9 月 23 日（金）、春が 2017 年 2 月 27 日（月）～3 月 24 日（金）であった。学生は、ホームステイまたは大学寮に滞在しながら、週 25 時間（1 日 5 時間）のフランス語授業（レベル別）を受講し、文化アクティビティに参加する。研修先は、グルノーブル大学、サンテチエンヌ大学で、学習環境、教育の質、受入れ体制の質について、きわめて優れた教育機関である。

参加者数は、夏が 5 名（グルノーブル 4 名、サンテチエンヌ 1 名）、春が 7 名（いずれもサンテチエンヌ）となった。本プログラムは 2016 年春に第 1 期生の送り出しを予定し、20 名の参加者を受け付けていたが、2015 年 11 月に発生したパリ同時多発テロ事件を受け、プログラム実施の中止を余儀なくされた。その後も依然として不安定な国際情勢が続く中、今年度の申込み数は少なくなったものの、意欲的な学生の参加を得ることができた。今年度も、夏プログラム申込み受付後の 7 月 14 日にニースでのテロ事件が発生したため、再び研修の中止を検討せざるをえない状況となったが、希望者のキャンセルを受け付ける形で、研修プログラム自体は実施することとなった。結果、当初の応募者 7 名のうち、2 名が参加を取り消し、5 名が第 1 期生として旅立った。5 名はいずれも十分な成果を上げ、帰国を果たした。帰国報告会では、研修に対する高い満足と今後の学習継続への意欲が語られた。

春プログラムには 7 名が参加予定であり、2 月初旬に事前研修を実施する。

夏・春ともに参加者全員が、平成 28 年度筑波大学海外留学支援事業（はばたけ！筑大生）「語学系研修等参加支援プログラム」による奨学金支給を受けることができた。

（文責：小松 祐子）

(\*Campus France は、フランスの高等教育機関への留学推進活動、留学生受入れ支援、国際学術交流のために設立された、フランス外務・欧州省、国民教育省、および高等教育・研究省が所轄する公的機関であり、現在、世界 108 カ国に 175 カ所の拠点を有する。)



## 平成 28 年度中国語夏季短期研修実施報告

文責：池田 晋

平成 28 年度の中国語夏季短期研修は中国・湖南大学において下記の日程で実施された。参加者は計 6 名。内訳は人文学類 1 名、国際総合学類 2 名、比較文化学類 1 名、社会学類 1 名、体育専門学群 1 名であった。

なお、平成 27 年秋に成田―長沙間の直行便が就航したことを受け、湖南大学担当者との協議の結果、今後の研修には可能な限り直行便を利用することを確認した。またこのことと併せて、昨年まで上海・北京でおこなっていた研修旅行を廃止し、代わりに湖南省内での研修旅行（張家界または湘西鳳凰を選択）を実施することに決定した。

研修先 : 湖南大学（湖南省長沙市岳麓山）

参加費用 : 約 25 万円

平成 28 年度湖南大学夏季短期研修日程表

8 月 26 日（金）	飛行機 羽田発－上海経由－長沙着 到着後 開講式、記念写真、歓迎会
8 月 27 日（土）	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（歌曲）
8 月 28 日（日）	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
8 月 29 日（月）	長沙市内見学
8 月 30 日（火）	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（歌曲）
8 月 31 日（水）	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
9 月 1 日（木）	岳陽楼見学
9 月 2 日（金）	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（舞踊）
9 月 3 日（土）	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
9 月 4 日（日）	ホームビジット
9 月 5 日（月）	①～③基礎中国語／④～⑤会話／⑥中国文化（書道）
9 月 6 日（火）	①～③基礎中国語／④～⑤聴解／⑥中国文化（料理）
9 月 7 日（水）	①～③基礎中国語
9 月 8 日（木）	午前：試験、午後：歓送会
9 月 9 日（金）	湘西鳳凰へ研修旅行に出発
9 月 10 日（土）	湘西鳳凰見学
9 月 11 日（日）	湘西鳳凰見学、午後長沙へ出発
9 月 12 日（月）	飛行機 長沙発－成田着